生活意識調査で見る
生活者のリスク管理

生活経済学会関西部会
平成17年度第1回研究大会（6月18日）
大阪ガス（株）エネルギー・文化研究所
豊田尚吾

問題意識

- 消費者基本法（H16）→消費者基本計画（H17）
  「消費者の安全・安心の確保」「消費者の自立のための基盤整備」「消費者トラブルへの機動的・集中的な対応」
- 詐欺事例の多発、
  ↓
- 消費者・生活者は、自立に向けた取り組みを行っているのか

報告内容

- 生活リスクの増大～事実認識～
- 生活意識調査～利用するデータの概要～
  基本的結果参照
- 生活リスク管理～仮説の設定とその検証～
  ①仮説設定：5つ（例生活リスク意識・行動に個人差）
  ②仮説検証→・・・
- インプリケーション
  生活者の多様性に注目。自立を促すトレンドの中、
  生活者に対する多様な対応を行う必要がある

仮説検証結果

- （1）生活リスク意識、情報行動には個人間で差異がある
- （2）意識、行動には、強くはないものの正の有意な相関がある
- （3）意味のあるグルーピングが可能である
- （4）リスク管理はライフスタイルに影響を受けている
- （5）リスク管理水準が高いほど、生活満足度が高い。一方で、リスク・デバイドの危険性もある。

生活リスクの増大～事実認識～

表1　商品・サービス分類別受付件数（H17　1～3月）

商品役務分類	件数	割合	商品の例
運輸・通信サービス	1747	74.7%	電話回線契約など
教養娯楽品	196	8.4%	電子ゲームソフトなど
商品一般	51	2.2%	特定できない相談
教養・娯楽サービス	51	2.2%	資格講座など
金融・保健サービス	49	2.1%	サラ金など
土地・建物・設備	37	1.6%	マンション販売など
住居品	37	1.6%	浄水器など
内職・副業・相場	28	1.2%	パソコン内職など
車両・乗り物	24	1.0%	カーナビなど
食料品	20	0.9%	健康食品など
その他	98	4.1%	
合計	2338	100.0%	

※（独）国民生活センター資料を基に作成

■ 厚生労働省「平成１５年度　社会福祉行政業務報告結果の概要（福祉行政報告例）」によれば、０３年度に生活保護を受けたのは約94万世帯、134万人とのことである。世帯数は過去最高、人数も９５年以降、増え続けている。同じく児童相談所での虐待相談の処理件数も2万6千件以上と過去最高であった。

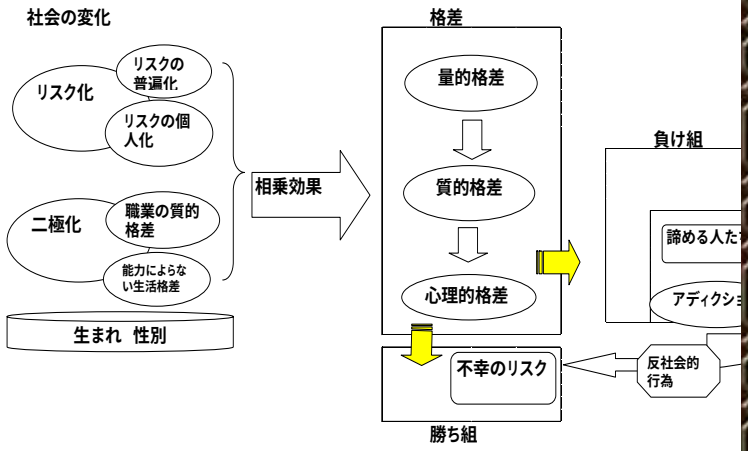
表2　刑法犯の包括罪種別認知状況の推移

年次	平7	平8	平9	平10	平11	平12	平13	平14	平15		平16	増減	
区分										(1～11月)	(1～11月)	件数	率(%)
刑法犯総数	1,782,944	1,812,119	1,899,564	2,033,546	2,165,626	2,443,470	2,735,612	2,853,739	2,790,136	2,548,632	2,365,206	-183,426	-7.2
(指数)	100	102	107	114	121	137	153	160	156	-	-	–	–
凶悪犯	6,768	7,010	7,684	8,253	9,087	10,567	11,967	12,567	13,658	12,342	11,993	-349	-2.8
(指数)	100	104	114	122	134	156	177	186	202	-	-	–	–
粗暴犯	35,860	37,506	40,570	41,751	43,822	64,418	72,801	76,573	78,759	71,262	70,471	-791	-1.1
(指数)	100	105	113	116	122	180	203	214	220	-	-	–	–
窃盗犯	1,570,492	1,588,698	1,665,543	1,789,049	1,910,393	2,131,164	2,340,511	2,377,488	2,235,844	2,048,939	1,830,981	-217,958	-10.6
(指数)	100	101	106	114	122	136	149	151	142	-	-	–	–
知能犯	56,928	61,187	61,316	59,271	53,528	55,184	53,007	62,751	74,754	65,608	89,879	24,271	37
(指数)	100	107	108	104	94	97	93	110	131	-	-	–	–
風俗犯	6,157	6,439	6,763	6,686	7,448	9,801	11,841	12,220	13,034	11,916	11,513	-403	-3.4
(指数)	100	105	110	109	121	159	192	198	212	-	-	–	–
その他の刑	106,739	111,279	117,688	128,536	141,348	172,336	245,485	312,140	374,087	338,565	350,369	11,804	3.5
(指数)	100	104	110	120	132	161	230	292	350	-	-	–	–

注：指数は、平成7年を100とした場合の値である。

（出所）警察庁「平成16年（1～11月）の犯罪情勢」

図1　希望格差社会の構造



（出所）「希望格差社会と信頼社会（前編）」豊田尚吾2005，季刊誌ＣＥＬ72号pp.71

生活意識調査
～利用するデータの概要～

- 目的:エネルギー･文化研究所は、「住まい･生活」に関して生活者が抱える現在の問題、期待する姿･方向、そのギャップを埋める解決策、今後のあり方などを分析･研究するために「これからの住まいとライフスタイルに関する生活意識調査」を実施

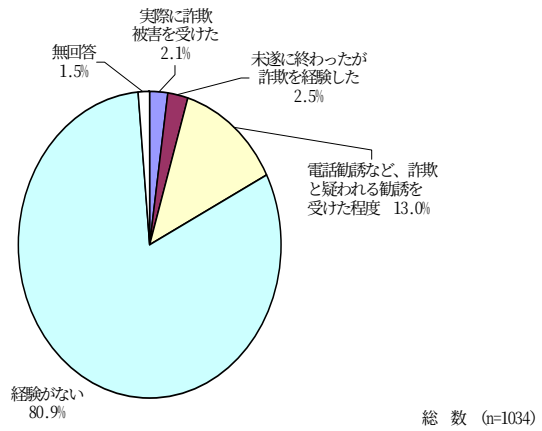
- 1.調査地域　：　全国
- 2.調査対象　：満20歳～69歳の男女
- 3.標本数　　：1500人（内回収数　1034人　性別　男性46.3%、女性53.2%）

- 4.抽出方法　：層化2段無作為抽出法
- 母集団は、2004年3月31日現在の20-69歳人口
- 5.調査方法　：留置記入依頼法
- 6.調査時期　：平成17年1月27日～2月14日
- 7.調査内容（別紙の通り）
- ･生活価値観
- ･住まい関連
- ･食生活関連
- ･消費生活関連
- ･環境問題関連
- ･エネルギー選択関連

表3　調査回答者の年齢分布

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	合計
調査回答者	11.8%	22.6%	22.0%	23.1%	20.5%	100.0%
国勢調査ベース	21.2%	19.7%	19.5%	22.3%	17.3%	100.0%
差異	-9.4%	2.9%	2.5%	0.8%	3.2%	

詐欺にあった経験（問31）



経験した詐欺の内容（問31a）

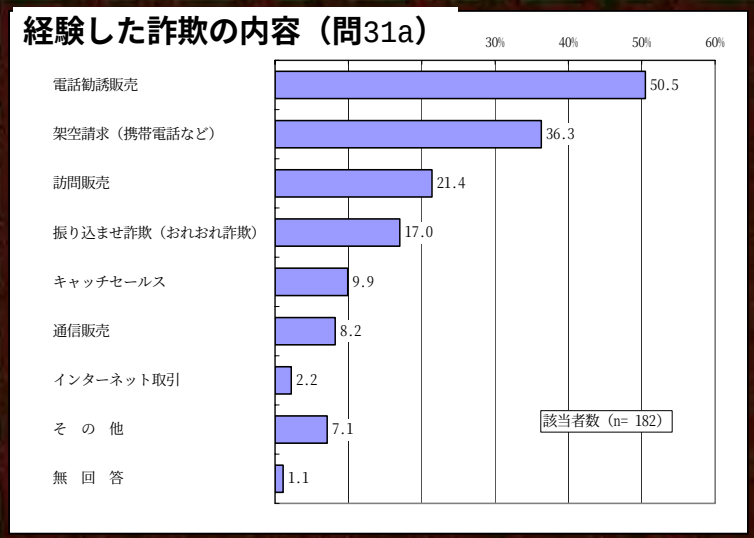


図4　生活の充足度

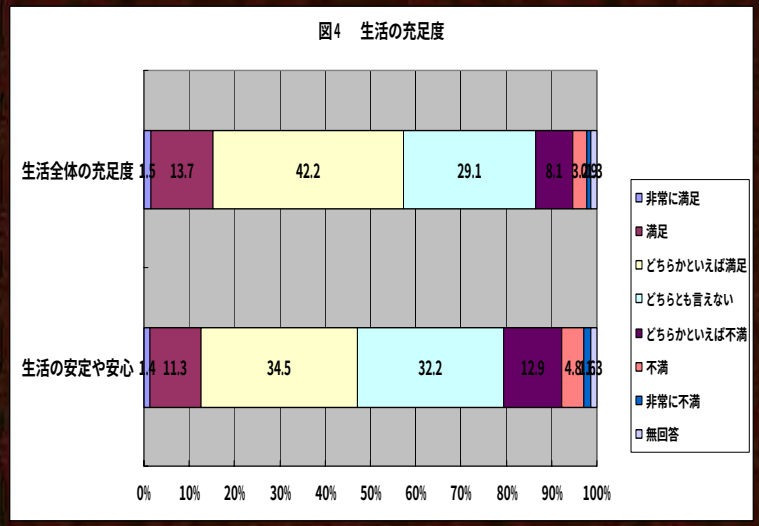


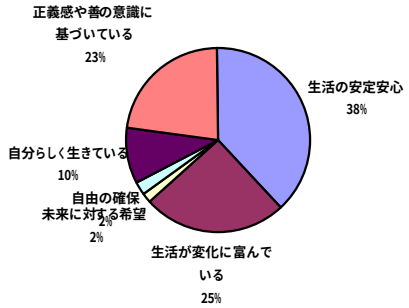
表4　生活充足度

上段：平均値
下段：分散

	男性		女性	
	生活全体	安定安心	生活全体	安定安心
20代	3.50	3.67	3.13	3.43
	1.75	1.87	0.93	1.18
30代	3.29	3.66	3.38	3.62
	1.08	1.56	1.17	1.41
40代	3.66	3.88	3.47	3.61
	1.51	1.54	0.96	1.22
50代	3.59	3.78	3.31	3.62
	1.17	1.23	0.73	1.10
60代	3.44	3.65	3.39	3.57
	0.83	0.95	1.16	0.99

色抜きは、項目内最大（小）値

図5　生活の充足度（要因分解）



生活リスク管理

- 生活リスクマネジメントに関する先行研究
  ↓
- 仮説設定
  ↓
- 仮説検証
  ↓
- インプリケーションへ

生活リスクマネジメントに関する先行研究

- ①リスクや不確実性を伴う意思決定問題
  期待効用仮説：Bernoulli,D～von Neumann and Morgenstern(1947)
  プロスペクト理論：Kahneman & Tversky(1979)
  状況依存的焦点モデル：竹村 (1994, 2004)
- ②消費者行動論からのリスク
  知覚リスクの認識：Bauer(1960)やBettman(1973)、Dowling(1986)
  リスク構成要素：山本(2003)
- ③ライフスタイル論から見たリスク
  AIO：Wells&Tigert(1971)
  VALS：スタンフォード調査研究所
  オーダーメードのライフスタイル指標：飽戸 (1999)

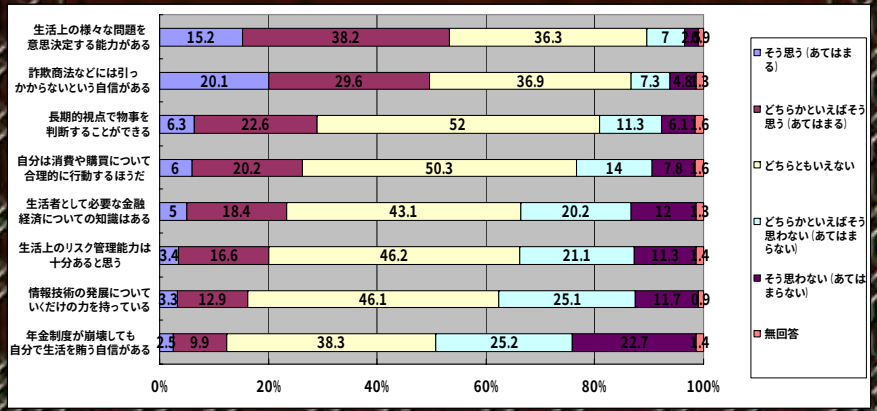
仮説設定

- ①仮説1.生活リスク意識、行動には個人間で**意味のある差異**が存在する
- ②仮説2. 意識、行動には**正の相関**がある
- ③仮説3. 意味のある**グルーピングが可能**である
- ④リスク管理は**ライフスタイル**に影響を受けている
- ⑤リスク管理水準が高いほど、**生活満足感**が高い

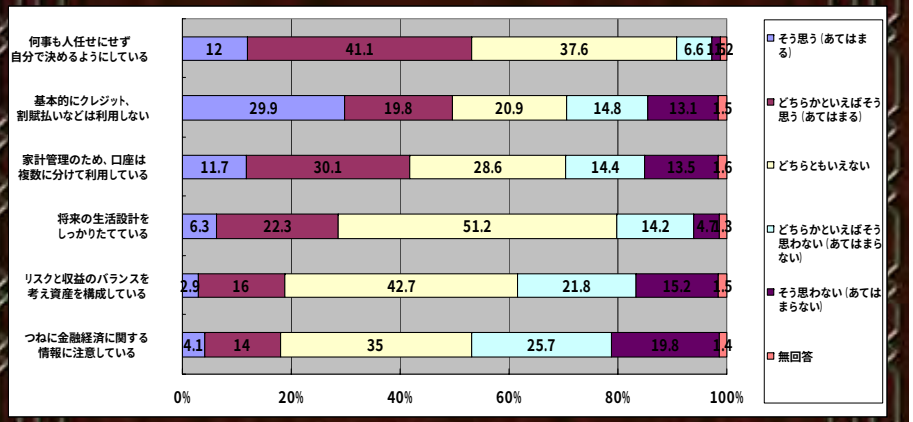
仮説検証

①生活リスク意識、情報行動には個人間で差異がある

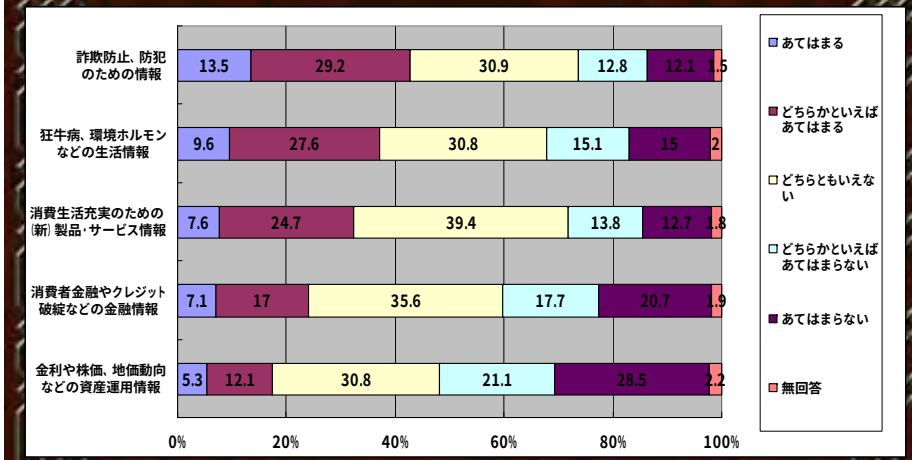
■ 生活リスクに関する意識（問30）



■ 行動に結びつく生活リスク意識（問30）



■ 生活リスク情報収集行動（問27）



■ 生活リスク管理実際行動（問28）

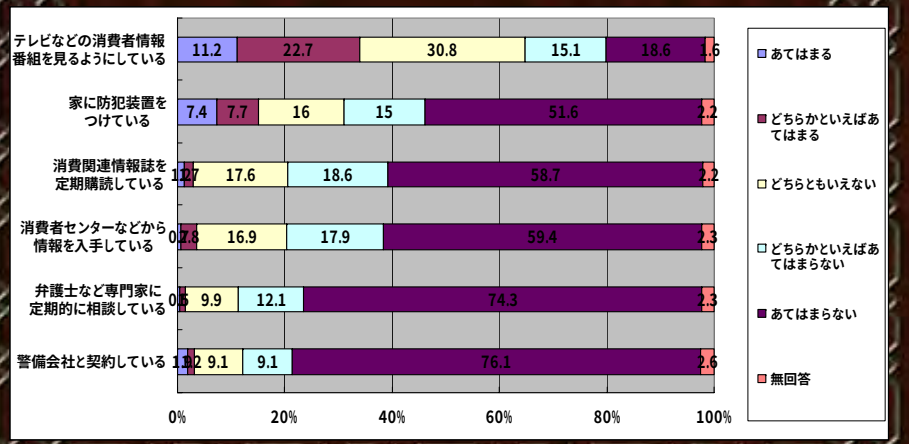


表5　生活リスク意識と性別、年齢別のクロス

意識	性別		年齢別	
	有意性	高得点群	有意性	高得点群
生活上の様々な問題を意思決定する能力がある	1%	男	-	-
詐欺商法などには引っかからないという自信がある	-	-	-	-
長期的視点で物事を判断することができる	1%	男	-	-
自分は消費や購買について合理的に行動するほうだ	-	-	-	-
生活者として必要な金融経済についての知識はある	1%	男	-	-
生活上のリスク管理能力は十分あると思う	1%	男	-	-
情報技術の発展についていくだけの力を持っている	1%	男	1%	若年層
年金制度が崩壊しても自分で生活を賄う自信がある	1%	男	5%	中年層
何事も人任せにせず自分で決めるようにしている	-	-	-	-
基本的にクレジット、割賦払いなどは利用しない	1%	女	-	-
家計管理のため、口座は複数に分けて利用している	-	-	1%	中年層
将来の生活設計をしっかりたてている	5%	男	1%	高齢層
リスクと収益のバランスを考え資産を構成している	1%	男	-	-
つねに金融経済に関する情報に注意している	1%	男	1%	高齢層

表6　生活リスク行動の性別、年齢別クロス

行動	性別		年齢別	
	有意性	高得点群	有意性	高得点群
詐欺防止、防犯のための情報	1%	女	1%	高齢層
狂牛病、環境ホルモンなどの生活情報	5%	女	1%	高齢層
消費生活充実のための(新)製品・サービス情報	-	-	-	-
消費者金融やクレジット破綻などの金融情報	-	-	1%	高齢層
金利や株価、地価動向などの資産運用情報	1%	男	1%	高齢層
テレビなどの消費者情報番組を見るようにしている	1%	女	1%	高齢層
家に防犯装置をつけている	-	-	-	-
消費関連情報誌を定期購読している	-	-	-	-
消費者センターなどから情報を入手している	-	-	-	-
弁護士など専門家に定期的に相談している	-	-	-	-
警備会社と契約している	-	-	-	-

②意識、行動には、強くはないものの正の有意な相関がある

- 相関係数：154通り（14×11）の組み合わせ
  正の相関（有意）が112組（約73%）、負の相関（有意）が6組（4%）、有意でないのが36組（23%）
- 意識と行動別々に主成分を求め、その主成分同士の相関関係
  2つの主成分の相関係数を求めると、0.339、1%基準で有意であった。

③意味のあるグルーピングが可能である

- ①行動の、情報収集に関する質問5問（問27）を基に、主成分分析を行うと1つの主成分が抽出される。これを情報収集行動に関する主成分とする。
- ②行動の、具体的リスク対応に関する質問6問（問28）を基に、主成分分析を行うと2つの主成分が抽出される。このうち、第1主成分は、「テレビなどの消費者情報番組を見るようにしている」という質問以外の項目と大きく関連しており、第2主成分は逆にその質問のみと関連が深い。従って、ここでは第1主成分のみで十分と考え、第2主成分をクラスター分析のデータとして用いないこととした

■ ③意識の基本質問8問（問30）について因子分析を子なった（主因子法、バリマックス回転）。結果として表7のような2つの因子が抽出された。ここでは第1因子を「リスク対応力」を表わす因子、第2因子を「リスク判断力」を表わす因子とする。

■ ④同様に具体的行動に結びつく意識を尋ねる質問6問を基に（問30）因子分析を行い、2つの因子を抽出した。第1因子を「合理性」を表わす因子、第2因子を「自律性」を表わす因子と考えた。

■ ⑤以上、合計6つの指標に関する得点を、回答者ごとに計算し、それをもとにクラスター分析を行った。検討の結果、5グループに分類することが最も意味が明確になると判断した。

表7　リスク意識の基本

	因子	
	1	2
生活上のリスク管理能力は十分あると思う	0.689	0.303
生活者として必要な金融経済についての知識はある	0.645	0.289
年金制度が崩壊しても自分で生活を賄う自信がある	0.600	0.111
情報技術の発展についていくだけの力を持っている	0.501	0.270
長期的視点で物事を判断することができる	0.275	0.804
自分は消費や購買について合理的に行動するほうだ	0.327	0.503
詐欺商法などには引っかからないという自信がある	0.114	0.495
生活上の様々な問題を意思決定する能力がある	0.333	0.364
因子名	対応力	判断力

表8　行動に結びつく意識

	因子	
	1	2
つねに金融経済に関する情報に注意している	0.777	0.071
リスクと収益のバランスを考え資産を構成している	0.715	0.150
家計管理のため、口座は複数に分けて利用している	0.404	0.301
将来の生活設計をしっかりたてている	0.405	0.520
何事も人任せにせず自分で決めるようにしている	0.192	0.478
基本的にクレジット、割賦払いなどは利用しない	-0.004	0.219
因子名	合理性	自律性

表9　クラスター分析によるグループ化

	グループ				
	1	2	3	4	5
情報収集	0.986	-0.488	0.921	-0.568	-0.618
積極行動	0.644	0.106	0.601	-1.797	0.173
対応力	1.066	0.111	0.053	-0.374	-0.874
判断力	0.727	0.328	-0.355	0.007	-0.724
合理性	1.174	0.131	0.177	-0.439	-1.002
自律性	0.442	0.165	-0.145	0.025	-0.487
人数	144	274	203	154	165

高水準
低水準

④リスク管理はライフスタイルに影響を受けている

一般的価値類型の5つの次元	
I 人生享受	
	1.経済的に恵まれていなくても、気ままに楽しく暮らせればよいと思う
	2.人は世間の目など気にせず、好きな人生を送るのがよいと思う
	3.あまり収入はよくなくても、やりがいのある仕事をしたい
	4.出世よりは、自分の人生をエンジョイする生活を送りたい
II 積極主流	
	5.リーダーになって苦労するよりは、のんきに人に従っている方が気楽でよい
	6.小さい頃から、お山の大将になるのが好きなほうだった
	7.少し無理だと思われるくらいの目標を立てて頑張るほうだ
III 伝統志向	
	8. 家族がうまくいくためには、自分の気持ちをおさえるほうだ
	9. 自分のことを考える前に他人のことを考えるほうだ
	10. 古いものは、長い間ずっと受け継がれ残ってきたという良さがあるのだから、できるだけ残そうとするほうだ
IV 自己充足	
	11. 自分の欲望にできるだけ忠実に生きるのが、本当の生き方だと思う
	12. 仕事であまり認められなくても、趣味やレジャーで他人から尊敬されればよい
	13. 配偶者以外でも、本当に愛し合える異性がいたら、性交渉をもってもよい
	14.結婚しても、必ずしも子供を産む必要はない
V 自己犠牲	
	15. 家族のため、会社のため、自分が犠牲になって頑張るのは、すばらしいことだ
	16. 頑張って出世してから、本当に自分のやりたいことができるのだと思う

(出所) 飽戸・松田 (1989)「ゆとり」時代のライフスタイル
日本経済新聞社,p43の表をもとに作成

生活意識調査 (2005) での結果

	人生享受	積極主流	伝統志向	自己充足？	自己犠牲？
1	0.578	0.002	0.078	0.018	-0.056
2	0.541	0.060	-0.088	0.066	0.036
3	0.442	0.150	0.232	0.007	-0.239
4	0.477	-0.171	0.033	0.137	-0.362
5	0.404	-0.518	0.042	0.093	0.023
6	-0.029	0.509	0.056	0.141	0.164
7	0.097	0.697	0.121	-0.006	0.083
8	0.061	-0.078	0.570	-0.062	0.066
9	-0.019	0.096	0.481	-0.009	-0.020
10	0.049	0.207	0.253	-0.135	0.010
11	0.487	0.016	-0.185	0.008	0.295
12	0.481	-0.124	0.094	0.093	0.004
13	0.103	0.075	-0.123	0.326	0.284
14	0.093	0.010	-0.062	0.431	-0.100
15	0.032	0.110	0.392	-0.085	0.329
16	-0.079	0.152	0.236	-0.056	0.468

因子抽出法: 主因子法　回転法: ﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

表12　グループ別因子得点平均値

	グループ				
	1	2	3	4	5
人生享受	-0.172	0.099	0.016	-0.095	0.054
積極主流	0.452	0.067	-0.028	-0.122	-0.420
伝統志向	0.084	0.035	0.018	0.014	-0.057
自己充足	0.141	-0.056	0.171	-0.141	-0.131
自己犠牲	-0.057	-0.003	-0.035	-0.049	0.099

表13　グループ別因子得点順位

	グループ				
	1	2	3	4	5
人生享受	1	5	3	2	4
積極主流	5	4	3	2	1
伝統志向	5	4	3	2	1
自己充足	4	3	5	1	2
自己犠牲	1	4	3	2	5

⑤リスク管理水準が高いほど、生活満足度が高い。

一方で、リスク・デバイドの危険性もある。

○グループとデモグラフィック特性

表14　グループと性別のクロス

性別		グループ 1	2	3	4	5	合計
1 男性	人数	53	111	103	75	96	438
	調整済み残差	-2.56	-2.40	1.34	0.57	3.29	
2 女性	人数	91	163	100	79	69	502
	調整済み残差	2.56	2.40	-1.34	-0.57	-3.29	
合計	人数	144	274	203	154	165	940

表15　グループと年齢のクロス

年齢		グループ 1	2	3	4	5	合計
20歳代	人数	28	16	35	20	16	115
	調整済み残差	2.87	-3.84	2.46	0.31	-1.10	
30歳代	人数	33	74	56	33	32	228
	調整済み残差	-0.41	1.26	1.25	-0.89	-1.60	
40歳代	人数	28	60	38	33	47	206
	調整済み残差	-0.78	-0.01	-1.24	-0.16	2.25	
50歳代	人数	29	67	40	32	33	201
	調整済み残差	-0.40	1.47	-0.66	-0.20	-0.48	
60歳代	人数	26	57	34	36	37	190
	調整済み残差	-0.70	0.29	-1.39	1.07	0.78	
合計	人数	144	274	203	154	165	940

表16　グループと学歴のクロス

学歴		グループ 1	2	3	4	5	合計
1 中卒	人数	21	22	17	22	7	89
	調整済み残差	2.30	-0.99	-0.59	2.21	-2.50	
2 高卒	人数	65	140	102	69	60	436
	調整済み残差	-0.29	1.81	1.28	-0.50	-2.79	
3 短専卒	人数	30	66	37	30	40	203
	調整済み残差	-0.22	1.16	-1.31	-0.73	0.96	
4 大卒	人数	25	42	43	31	54	195
	調整済み残差	-1.07	-2.67	0.19	-0.24	4.25	
合計	人数	141	270	199	152	161	923

○詐欺経験との関係

表17　グループと詐欺経験のクロス

詐欺経験		グループ 1	2	3	4	5	合計
被害にあった	人数	4	7	2	5	1	19
	調整済み残差	0.71	0.75	-1.18	1.19	-1.44	
未遂	人数	3	5	6	3	9	26
	調整済み残差	-0.54	-1.13	0.20	-0.67	2.28	
勧誘程度	人数	17	43	19	22	24	125
	調整済み残差	-0.56	1.39	-1.84	0.41	0.46	
なし	人数	118	216	173	122	131	760
	調整済み残差	0.46	-1.02	1.97	-0.51	-0.85	
合計	度数	142	271	200	152	165	930

○生活知識との関係

表18　グループと生活知識のクロス

生活情報知識	グループ 1	2	3	4	5
電子マネー	5	4	3	2	1
地域通貨	5	3	4	2	1
消費者基本法制定	5	3	4	2	1
京都議定書発効	5	2	4	3	1
ペイオフ	5	3	4	2	1
総額表示	5	3	2	4	1
情報収集因子得点	0.99	-0.49	0.92	-0.57	-0.62

○生活充足度との関係

表19　グループと生活充足度のクロス

	グループ				
基本欲求	1	2	3	4	5
生活全体	5	4	2	3	1
安定・安心	5	4	3	2	1
変化に富む	5	4	3	2	1
希望を持つ	5	4	3	2	1
人間関係	5	4	2	3	1
自由度確保	3	5	2	4	1
自分らしさ	4	5	3	2	1
正義・善	5	4	3	2	1
平均値	4.63	4.25	2.63	2.50	1.00

	グループ				
生活場面	1	2	3	4	5
働く	5	4	3	2	1
趣味レジャー	5	3	4	2	1
消費する	3	5	4	2	1
癒す	4	5	3	2	1
学ぶ	3	5	4	2	1
交わる	3	4	5	2	1
育てる	5	4	3	1	2
平均値	4.00	4.29	3.71	1.86	1.14

	グループ				
金銭面	1	2	3	4	5
収入	4	5	3	1	2
貯蓄・資産	5	4	3	1	2

表20　グループと生活程度（生活階層意識）とのクロス

生活程度		グループ 1	2	3	4	5
上	人数	0	2	1	0	0
	調整済み残差	-0.74	1.44	0.50	-0.76	-0.81
中の上	人数	11	26	21	17	35
	調整済み残差	-1.67	-1.32	-0.67	-0.25	4.10
中の中	人数	76	147	108	89	95
	調整済み残差	-0.61	-0.33	-0.48	0.93	0.59
中の下	人数	37	76	59	36	27
	調整済み残差	0.16	1.31	1.53	-0.46	-2.92
下	人数	19	18	11	9	8
	調整済み残差	3.20	-0.24	-0.94	-0.55	-1.20
	平均ランク	513.7	479.1	475.8	456.5	391.5

インプリケーション

■ 生活リスク意識および行動には個人差があり、両者には強くはないが正の相関がある。したがって、リスク意識と行動の有様をもとに、生活者をグルーピングすることができる。そのグループは各人のライフスタイルに影響を受けており、一方で生活の充足度や社会階層意識とも結びついている。自立を促すトレンドの中、生活者に対する多様な対応を行うことで、リスク管理に関する社会格差拡大を避けるという意識が必要である。そのためには、生活意識の啓蒙に努めるため、第2グループに属するような生活者には基本的な意識付けの施策で対応し、第5グループには‥といった、政策上の戦略が必要になる。

■ ＜参考文献＞
■ 飽戸弘他 (1989)「第Ⅰ章　ライフスタイルの新しい視点」『ゆとり時代のライフスタイル』飽戸弘･松田義幸編,日本経済新聞社,pp.40-42.
■ 飽戸 (1999)『売れ筋の法則－ライフスタイル戦略の再構築』ちくま書店
■ 神山進 (1997)「消費者の真理と行動」中央経済社
■ 竹村和久 (1994) ”フレーミング効果の理論的説明－リスク下での意思決定の状況依存的焦点モデル－.”, 心理学評論Vol.37.No.3,pp.270-291.
■ 山本昭二 (2003)「消費者のリスク対応行動と情報処理--サーベイデータから」商学論究 51(2) 関西学院大学商学研究会 ,pp.21-37.

■ Kahneman, D., & Tversky,A. (1979). Prospect theory: An analysis of decision under risk. Econometrica, 47, 263-291.
■ von Neumann,J and Morgenstern,O(1947)”Theory of Games and Economic Behavior”2nd ed.Princeton Univ.Press.
■ Bauer,R.A.(1960)”Consumer Behavior as Risk-Taking,” in R.S.Hancock ed.Dynamic Marketing for a Changing World.Chicago:American Marketing Association,389-398.cited from D.F.Cox ed.,Risk-taking and Information Handling in Consumer Behavior,Boston:Harvard University Press,1967,23-33.
■ Bettman,James R.(1973)”Perceived Risk and Its Components:A Model and Empirical Test,”Journal of Marketing Reserch,10(may),184-190.
■ Dowling,Graham R.(1986),”Perceived Risk:The Concept and Its Measurement,”Psychology & Marketing,3(fall),193-210.
■ Wells,W.D.&Tigert,D.J.(1971)”Activities,interests and opinions.”Journal of Advertising Reserch,11,27-36.